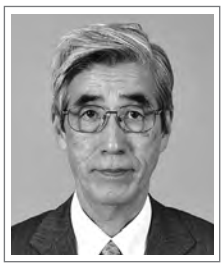
UPĀYA
ウパーヤ
四天王寺大学 仏教教育広報誌
平成28年4月1日
Vol.8

心に仏教の教えを

事務局長
山中 薫

1270年前の貝塚、私の家の脇を1人の僧が駆けるように山に向かっていました。頭に被った傘、身に着けている衣は白く埃を被り、誰の目にも長旅の苦労が偲ばれました。ちょうどそのとき、一羽の鳥が空を舞い一枚の羽を落としてその僧の進むべき道を示し、暫くして16人の清らかな童児がその僧の手を引き、山へ導いて行きました。僧の名前は、後に日本で初めて大僧正の位が与えられた行基上人。聖武天皇の勅命を受け、観世音の尊像を探しての旅の途中でした。これは私がときどき子供たちやご近所に越してこられた方に話す天台宗別格本山龍谷山水間寺の開山由来です。もちろん当時に私の家はありませんが、その道は今も水間街道と呼ばれ市の幹線道路になっています。また鳥の羽が舞い落ちたところ、16人の童児が現れたところは、それぞれ謂れのまま町名として残っています。

みなさんの近くのお寺にも、きっとこのような由来は残っているでしょうから、一度調べてみてはいかがでしょうか。我が家では毎年元日の朝や、大きな節目には家族そろってこの水間寺にお参りをし、本堂でご祈祷して頂き般若心経と観音経を唱えます。大きな本堂での読経は、一体感が高まるとともに、遠い昔から引き継がれてきた仏の教えの偉大さを感じざるを得ません。多忙な日々と情報過多の社会において、仏の教えに触れる機会が少なくなっていくことに大きな寂しさを感じます。しかしIBUのみなさんは、授業において「礼拝」という実践行から仏教精神に触れ、「仏教概説」の講義において聖徳太子のお心を学ばれました。偏らない「空」のこころ、他者を思いやる「利他」のこころ、そして人の気持ちに寄り添うことの大切さを学んだと思います。これからはより一層様々な出来事に出会うことでしょうが、ふとした時に思い出してください。これらの経験は無意識のうちにも、きっとみなさんの心のうち深くに刻まれていることでしょう。



「父母の歌」に思う

入試広報部長
人文社会学部　日本学科 教授
谷口 政巳

私の両親は、典型的な父性と母性でもって私を育ててくれたが、ともに空や土になって久しい。「四恩に報いよ」と声高に言わずとも「父母の歌」が堂内に響くのは、学生の皆さんもそれぞれの両親の姿を重ねあわせているからに違いない。

父性と母性は対極にあるものだが、考えてみると上下、左右、大小、明暗、貧富・・・と、世の中にあるものすべてに対極がある。この対極が絶対的なものかというと、そうではない。すべて相対的なものであって、どこかに基準を置き、その基準で上下、左右と分けているのである。「分かる」の語源が「分ける」であるように、私たち人間は、どこかに基準を置いて事象を分け、世界を理解する一方、妬みや怒り、苦しみなど多くの煩悩をも生み出してきた。しかし、基準は人間が作り出したもので、事象自体には何の基準もない。まさに「諸法空相」にして「不生不滅。不垢不浄。不増不滅・・・」の世界が実体なのだ。

教育にも父性と母性がある。教は、孝（爻と子）と攵（攴）が結合した字であり、子どもと交わり鞭で導くというのが原義で、子どもを外から厳しく教え込むことを意味し、父性に近い。育は、亠（子）と肉（食物）が結合した字であり、生まれた子に食物を与えるというのが原義で、子どもを内から優しく育むことを意味し、母性に近い。教育方法の理論でも本質主義（Essentialism）と進歩主義（Progressivism）が常に対立してきたが、もう卒業してもよかろう。父性も母性も、子どもの成長に欠かせないものだからである。

「和」の意味は、論語の「君子は和して同ぜず」を引くまでもなく、違いが前提となっている。違いを大切にしながら調和するのが和である。違いを対立させるのではなく、高い次元で違いを統一する、これが実践行としての「和の精神」であり、分けて理解することを超えた彼岸に悟りはあるのかもしれない。

「利他のこころ」を持つ勇気

四天王寺大学学長

西岡 祖秀

利他とは文字どおり「他人に利益を与えること」であり、中国・日本に伝えられた大乗仏教では自己の利益より他者の利益を優先する行為を最も重視しています。この教えを深く理解された聖徳太子（574－622）が約千四百年前に、人間教育の場として創建された四天王寺敬田院を起源とする本学は、「利他のこころ」を現代に受け継ぐことを使命としています。

しかし、現代社会は儲けるためには法を犯さない限り、何をやってもいいという市場原理主義が横行し、利己主義がはびこっているように見えます。このような状況において、利他的な行動は可能でしょうか？また利他的な行動にどのような意味があるのでしょうか？少し考えてみたいと思います。

現代社会の利己主義と仏教の利他主義とでは、そもそもその背景となっている価値基準が異なっています。現代社会すなわち世間においては、損か得か、役に立つか立たないかが価値の基準になっています。それに対して、仏教すなわち出世間においては、損か得か、役に立つか立たないかといった世間的な価値の基準を超越しています。「損・得」、「役・不役」などといった相互に相矛盾する二つの極端な立場を離れた自由な立場をとるのです。これを「中道」といいます。

この両者の相容れない状況に関して、曹洞宗の開祖である道元（1200－1253）はつぎのように明快な見解を述べています。

> 「愚人おもはくは、利他をさきとせば、みづからが利、はぶかれぬべしと。しかにはあらざるなり。利行は一法なり、あまねく自他を利するなり。」
>
> 「（訳）愚かな者は、他者の利益になることを先にすると、自分の利益が無くなるだろうと思っている。しかし、決してそうではない。利益になることをするという行為は唯一の完全な行為であり、あまねく自分も他者をも利するのである。」

ここにいう愚かな者とは世間的な価値基準にしたがう者のことであり、かれらは自利的な行動と利他的な行動とを区別します。それに対して、仏教者は「自・他」を超越しているため、利他的な行動をとることがそのまま自利的な行動となり、結果として両者にとっての利益になると結論づけています。

また道元は、利他的な行動を「自未得度、先度他（自分はまだ生死の苦海を渡りきらない前に、まず一切の衆生を渡そうとの願をおこし、その実現につとめること）」と定義し、自分より他者の救済を優先させることであると明言しています。この利他的な行動を現実において究極的なかたちで示されたのが、平成 26 年 4 月 16 日のセウォル号沈没事故でのパク・チヨンさんです。彼女は沈みゆく船内にあって、生徒たちを先に救助するために救命胴衣を渡しながら、「乗務員の退避は最後、みんなを助けた後に、私も行くから。」という言葉を残して亡くなられたと報道されました。このパク・チヨンさんの行為は人間の利他性・崇高性を示すものであり、これこそが社会を存続させる基盤であるあるといっても過言ではありません。

さて、前述の道元の「自他不二」の考えをさらに推し進めるものとして、私にとって忘れられない言葉があります。私は平成元年に病気療養の父に代わって自坊の住職になりましたが、その就任式に導師としてご出席いただいた曹洞宗管長の梅田信隆禅師（1906－2000）より、つぎのようなお祝いの言葉をいただきました。

> 「私は常々修行僧に“損は悟りなり、得は迷いなり”といい“損のできる和尚になれ”と話している。寺を“損のできる人”をつくる道場として欲しい。」

ここでは、「損・得」を超越するのではなく、むしろ世の中で損な立場に甘んじることを勧めています。利己的な行動が満ちあふれている現代社会において、あえて損な立場を選ぶことは勇気以外の何ものでもありません。この勇気によってこそ私たちは世間の偏った価値基準から解放され、本当の自分を取り戻すことができるのではないかと思います。現代における勇気とは、「利他のこころ」を持つことではないでしょうか。私は言うまでもなく“損のできる和尚”ではなく、また“損のできる人”を育てる道場も不備のままです。今後はこれらの実践を生涯の課題にしたいと思っています。

最後に私事にわたることで恐縮ですが、私は昭和 59 年に本学に奉職しました。今年で 32 年になりますが、3 月末日をもって退職いたします。この間、すばらしい学生、教員、職員の方々に恵まれて幸せな教員生活を送ることができました。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

本誌「ウパーヤ」の編集に参加しませんか。

仏教広報誌「ウパーヤ」では紙面作りに参加してくれる学生編集員を募集しています。

これまで第 4 面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材・記事の執筆をはじめ、授業の一環として実施している野中寺での座禅会を体験して、その活動内容をレポートするなど、本誌の編集に参加してもらっています。

学科専攻は問いません。仏教、寺院、仏像、歴史などに興味のある方、また取材や記事の執筆など新聞制作に関心のある方は、いちど第 4 面下に記載のメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声がけください。ご連絡をお待ちしています。

（矢羽野 隆男）

第8回 卒業生インタビュー

話し手：平田　空美（ひらた　くみ）　奈良県特別支援学校養護教諭
平成24年3月 教育学部保健教育コース　卒業生
聞き手：桃尾 幸順（仏教Ⅰ・Ⅱ導師・日本学科講師・本欄編集）

仕事について

現在私は奈良県の特別支援学校で養護教諭をしています。特別支援学校にはいろいろな種類があるのですが、私が現在勤めているのは小・中・高が集まっている学校で、知的障害、主に発達障害、先天性の障害をもっているお子さんが通っています。養護教諭の仕事はいわゆる保健室の先生で怪我の手当てや体調不良の時の対応などですが、特別支援学校の場合は医療機関との連携も結構多いです。生徒さんの中には保健室を恐れる子も多く、いきなり処置に入るのではなく、しばらく会話をしてリラックスしてもらってから処置するなどの工夫も必要です。また普段と違うパターンを嫌う傾向があり、熱があっても、教室に行きたがる場合もあります。健康診断のように、外部のお医者さんが来る際は特にドキドキするので、ぬいぐるみやおもちゃを使ってお医者さんが診断しやすいように手伝う場合もあります。このように大変なことも多いですが、本校は養護教諭が複数配置なので先輩の先生にいろいろ教えてもらえたり、相談できたりする面では助かっています。言葉でのコミュニケーションが難しいお子さんが多いのですが、様々な工夫をすることによって意思の疎通が図れるようになったり、検査などを年々上手に受けられるようになってきたりして子供たちの成長が実感できるとやりがいを感じるしうれしいですね。

礼拝について

私はもともと和歌山県の高野山の出身で、幼稚園の時にも般若心経を唱えたり、初詣でも高野山のお寺に行ったりして、お寺の雰囲気には親しんでいました。ですから礼拝の時間の読経や写経も違和感なくすんなり入っていけました。大学は普段の授業は別々に受けているのに、週に一度、皆が集まって礼拝に参加するのは、引き締まる感じで私は好きでした。また私は最初の２年間寮生活をしていたのですが、何か体調が悪かったり、落ち込んだりした時に瞑想でいったん落ち着いて静かに自分一人の時間を作ることで、自分の気持ちがニュートラルになるというか、自分を見つめなおすことができました。写経には楽しく取り組めました。書き方の工夫や漢字の並びの意味を考えたりする良い機会でした。写経の時間は黙々と集中して取り組めました。これは教育実習の時に教材研究をしたり、次の日のことを考えたりするときに、落ち着いて丁寧に取り組めたことにつながっていたのだと思います。今はそれが保護者の方にお手紙を書く時や電話を掛ける際に、一度落ち着いてから行うようする習慣になっています。

聖歌は「父母の歌」が大好きでした。当時は実家を離れて寮生活をしていたので、悩んでいる時に不思議と母からメールがきたりして、離れているからこそ親のありがたみを感じていたので、「父母の歌」を歌いながら涙ぐむこともあったくらいです。友達もみな「父母の歌」は好きでしたね。

学園訓について

今の仕事では、担任の先生や他の先生方、保護者の方と相談しながら人とのつながりで子供の成長を見守っています。必要に応じて担任の先生と一緒に保護者の方と面談することもあるのですが、そういう時は間に入って、意思の疎通をスムーズにすることを心掛けています。これは和の精神にもつながるのではないでしょうか。礼儀もやはり大事ですね。慣れてくると他の先生や保護者の方とも気さくに話せるようになってくるのですが、そうなっても初心に戻って礼儀は忘れないようにしています。誠実という面では自分がやりやすい仕事と子供にとって大事なことは違うことがあるので、自分にとっては負担がかかることであっても、子どもの立場に立って考えるように意識しています。これが仕事に対して誠実に向き合うことであると思っています。恩に報いるという点では、私たちは保健教育コースの一期生だったので、先輩がいなかったのですが、その分先生方が現場で働いている方を呼んできて話をしてもらったりするなど工夫していろいろなことを教えてくださったことを、現場で生かしたり、後輩や生徒さんに教えたりすることが大事なのだと思います。健康に関しては私が１回生の時、４回生のピア活動をしている先輩が、HIV（エイズ）予防啓発について礼拝の講話の時に話をしてくださったのが印象に残っています。自分たちも学科としてピア活動に取り組んでいたので励みになりました。

在学生へのアドバイス

将来の仕事につながることではなくても、興味があることや好きなことに積極的に挑戦してほしいです。働きだしたら自由な時間を作ることは難しくなります。学生の間はまだ融通が利く面があるので、是非それを生かしてほしいです。趣味を持っていれば就職してから仕事と休みのけじめを付けやすくもなります。また私は歴史研究部に入っていたのですが、そこでいろいろな学科の人といろいろな話ができましたし、教育学部の中でもさまざまな人と関わることができました。４年間が終わってみれば、いろいろな人と出会えたことは、今の仕事で様々な子どもたちと関わる上でとても良かったと思います。皆さんもやりたいと思ったことをどんどん実行して、是非いろいろな人と関わってください。

平成27年度 冬学期「仏教Ⅱ」 講話題目

９月17日	学長 西岡 祖秀先生「写経の意義」
９月24日	鈴木 崔史先生「写経の仕方・作法」
10月１日	桃尾 幸順先生「写経について」
10月15日	藤谷 厚生先生「菩薩の精神」
10月22日	拝田 清先生「海外研修について」
10月29日	上績 宏道先生「和顔愛語について」
11月５日	桃尾 幸順先生「学園歌について」
11月12日	上野淳子先生（社会学科）「親密な関係における暴力―被害者にも加害者にもならないために―」
11月19日	毛受矩子先生、楠本久美子先生、高橋真紀子先生（保健センター看護師）&教育学科保健教育コースの皆さん（安藤夏美さん・米原静香さん・瓜原薫さん・山田夏菜子さん）「食育について」
11月26日	桃尾幸順先生&喫煙マナー向上委員会の皆さん（松本健太さん、山崎耕作さん、杉浦ちひろさん、種子田凌子さん）「学内の喫煙マナーについて」
12月３日	斎藤敏之先生・坂本暁美先生& e-COCOROEプロジェクトの皆さん（田守里帆さん、塚本和輝さん、辻畑真太郎さん、永井寛人さん、仲谷真衣さん、福田達彦さん）「人権週間にちなんで―SNSを知ろう」
12月10日	兼子 恵順先生「聖徳太子徳失鏡」
12月17日	谷 明日香先生（生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻）&生ラ専攻の皆さん（一ノ瀬楓さん、杉本美紀さん）「捨てる服 活きる服」
１月７日	桃尾 幸順先生「礼拝の意義」
１月14日	矢羽野 隆男先生「学園訓について―誠実―」

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

― 道明寺（藤井寺市）―

大学からも近い道明寺は、聖徳太子の尼寺建立の発願に応え、土師連八島が邸宅を寺に改めたものだと伝えられています。実際に境内に入ってみると、尼寺だけのことはあり、すっきりとシンプルな佇まいで、どこか優しい雰囲気も感じられます。きれいに整えられた砂利や、よく手入れされた梅の木など、ひとつひとつが美しく目を引きます。ところどころに、小石で「和」や「絆」といった漢字が描かれており、小さなさりげない遊び心にほっこりとさせられることでしょう。

敏達天皇13年（584）、蘇我馬子は百済からもたらされた仏像を祀る石川の家で、三人の娘を出家させました。善信尼、禅蔵尼、恵善尼で、この三人が日本初の出家者になります。『聖徳太子伝暦』によると、聖徳太子もときどきお忍びで出かけては、馬子と「仏法を興隆させよう」と語らったとされています。

ところで、馬子はなぜ、男子ではなく女子を出家させたのでしょうか。実は、馬子が女子を出家させた理由について、はっきりとした記述は残されていません。欽明天皇13年（552）の仏教伝来以来、仏教受け入れの是非をめぐり、排仏派の物部氏と崇仏派の蘇我氏との間での勢力争いが激しくなっていました。欽明天皇は仏教にある程度の理解を示していましたが容認はしておらず、次の敏達天皇は仏教に好意を持っていませんでした。公認されていない仏教に帰依するのは法を破ることになります。よって、男性を出家させるよりも、女性を出家させたほうが問題は少ないと考えたのではないか、というのが、哲学者の梅原猛氏の説です。

敏達天皇ののちに即位した用明天皇（太子の父）は、仏教に関心がありました。善信尼は、「出家の道は受戒が根本のため、百済に行って受戒を学びたい」と願い出るものの、用明天皇が亡くなったため、実現しませんでした。

しかし、その願いは崇峻天皇が即位したことで実現します。善信尼らは、2年間にわたり百済に留学し、崇峻天皇3年（590）に帰国。その年はほかにも数々の尼が出家しており、善信尼の兄弟も僧になったといわれています。

それから4年後の推古天皇2年（594）には、「三宝興隆の詔」が出され、日本は仏教を国の基盤とする時代を迎えます。この土師氏が寄進した道明寺の尼たちも、新しい時代の幕開けを担ったことでしょう。

その土師氏の子孫が、勉学の神様として有名な菅原道真です。道真が彫ったとされる十一面観音立像は国宝に指定されており、毎月18日と25日に御開帳されます。

（ウパーヤ学生編集員：三宅　亜季）

仏教のことば

― 菩提 ―

日本では檀信徒として、お墓や位牌を置き、仏事を営んでもらうお寺のことを菩提寺といい、俗に亡くなった人の冥福を祈る際に、「菩提を弔う」ということがありますが、菩提とは、古代インドのサンスクリット語のBodhi（ボーディ）を音写したものです。智、道、覚などと訳されますが、三毒といわれる貪欲（むさぼる心）・瞋恚（いかりの心）・愚痴（おろかな心）に代表される煩悩をなくして得られた悟りの境地のことです。

菩提は、悟りで得られた智慧であり、これを得た者として阿羅漢（仏弟子・出家修行者）・辟支仏（独自に悟りを開いた者）・仏の三種があげられます。特に仏の菩提は、最高のもので阿耨多羅三藐三菩提（無常正等正覚と訳される）と呼ばれています。

また、菩提を求める心（悟りを求め衆生を救済しようとする心）を菩提心といい、無上菩提（この上もない悟り）を求める者を菩提薩埵、いわゆる菩薩と呼び、菩薩が悟りの智慧を得ることで仏となるとされています。

仏教には「煩悩即菩提」ということばもありますが、私達には「煩悩」と「菩提」それぞれの心が同時に存在しており、「煩悩」をなくしていこうとする心が「菩提」の心を生むということにもつながるわけです。

（上續　宏道）

編集後記

今回は、本年度で退職される西岡学長から「『利他のこころ』をもつ勇気」というお話を頂きました。学生の皆さんにはこのお話の内容をこれからも心に留めておいてほしいと思います。山中事務局長と谷口入試部長のお話、保健教育コースの卒業生、平田さんのインタビューでも仏教や礼拝の重要性がよく伝わってきます。「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」では大学からも近い道明寺が取り上げられています。機会がありましたらお参りしてみてはいかがでしょうか。

なお谷口先生のエッセイや卒業生インタビューにある「父母の歌」をはじめ多くの仏教聖歌の作詞をされ、第6号のウパーヤにも寄稿された本学名誉教授・三島佑一先生が1月5日に逝去されました。一同謹んでご冥福をお祈り致します。（K.M）

研究所員紹介

所　　長　西岡　祖秀（学長・教授）
主任研究員　矢羽野　隆男（教授）
研 究 員　上續　宏道（教授）
兼子　恵順（教授）
藤谷　厚生（教授）
源　健一郎（教授）
桃尾　幸順（講師）
南谷　恵敬（客員教授）

UPĀYA（ウパーヤ）8号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

平成28年4月1日 発行
発　行　四天王寺大学
仏教文化研究所 仏教教育センター
所在地　大阪府羽曳野市学園前三丁目2−1
TEL:072-956-3181（代）　FAX:072-956-0611
URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPĀYA（ウパーヤ）」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail bukken@shitennoji.ac.jp
（件名は「ウパーヤ」としてください）